洛友會々報

京都市一京区吉田
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛　友　会

海外旅行の印象

昭一四　田中哲郎
（京都大学化学研究所教授）

去る三月中旬に出発し、米国をはじめヨーロッパの数ケ国を旅行して七月上旬帰国した。三月下旬にニューヨークで開かれたIRE年次大会と五月下旬ロンドンで開かれたトランジスタに関する国際学会に出席し、併せて筆者の専門とするエレクトロニクス材料研究の現況をみることが目的であったが、はじめて諸外国の風物景観に接する機会を得、仕事以外にも種々得るところがあった。

かなり長期間の旅行だったので出発前に恩師阿部先生より元気で帰って来たら八〇点やるというお言葉を貰ったが、幸い旅行中一度も病気をせずおまけに体重を一貫目ばかりふやして帰って来たのでまずまず快成績を貰ったことになるわけだが、気候に恵まれたことと、余り重い義務を負わずに出発し、比較的のんびりと旅行を楽しむことができたことによると思う。専門分野のことは別の機会にゆずりここでは旅の印象といったものを思いつくままに綴ってみる。しかし印象というものは旅行径路、期間、目的、予算等多くの条件によって各人各様であるべきで、筆者のうけた印象があるいは多少偏ったものであるかも知れないことをあらかじめお断りしておく。

晩秋の候ともなれば電気教室玄関のあのなつかしい公孫樹の真黄な落葉は恰も毛氈を敷きつめたようである。

アメリカには二ケ月足らず滞在し、その間多くの大学、会社および研究所を訪問した。まず国の広さと万事スケールの大きいのに驚く。自動車、飛行機をはじめ各種交通機関ならびに通信網の発達はこの国に必然的なもので、全く必要から生れたものであることを痛感する。はじめての旅行者にとって何より困るのは、言葉の問題である若い頃学校で習った我々の英語では殆んど役に立たない。一番簡単な数字の発音が通じ難い。ホテルでエレベータに乗るときでも電話をかけるときでも所要の階数や番号を通じさせるのが一苦労。まして一寸複雑なことになるととても駄目である。

滞在の終り頃には少しは聞けるようになり、また通じるようにもなったが言葉の弱味は旅行の印象を悪くする。それに日常生活費がたかいことも気持をいぢけさせる原因になる。もう一つチップの心配がある、これは旅行全般を通じてであるがこの習慣になれない我々日本人にはこれが相当な重荷に感じられる。食事のメニューが読めないことは当然といえば当然だが、多くの旅行者が大なり小なりホームシックにかかる原因の一つは食事にあると考えられる。ほしいものがないか、あっても判らないかの何れかで何となく満ち足りない気分を味わうのは、あながち筆者だけではないと思う。

以上は卑近な日常生活に関する印象であるが、ニューヨークやシカゴで代表されるアメリカはどうしても我々のはだに合わない。活動的で能率的で万事スピーディなことは美徳であるには違いないが、余裕とか落着きを欲する筆者には、ただ殺風景なあわただしさのみが印象に残る。しかしワシントンやボストンなどは余程違った味わいがあった。ワシントンを訪れたときはあたかも桜花満開の絶好の季節であり、ボストンの落着いた雰囲気は旅の疲れをいやしてくれた。ワシントンやボストンの博物館はヨーロッパでも見られない多くのコレクションをもち街の雰囲気と相まって充分な慰安を与えてくれた。殊に一夜きいたボストンシンフォニーオーケストラのすばらしさはたとえようもなくいまだにそのいきいきとした演奏が耳に残っている。

アメリカを去ってはじめて入ったヨーロッパはドイツのミュンヘンであった。頃は五月のはじめ、マロニエの花咲きみだれ、花という花が一時に開くという五月である。全くよい時機にぶつかったもので、このよい季節にヨーロッパめぐりという幼い頃からの夢が実現出来ると希望に胸がふくらむ思いがした。アメリカと違って物価もやすいしビールやワインもふんだんに飲める。それに不思議なことに英語がアメリカより通じやすい。少くとも言葉のひけめを感じなくてすむ。風光明媚なことはいうに及ばず歴史の古いヨーロッパはどこに行っても観賞するものがふんだんにある。全く我を忘れて約二ケ月のヨーロッパ旅行を楽しんだ。

よく云われるとおりヨーロッパでは水より酒の方がやすい。はじめのうちはいい気になって土地の人のまねをして昼間からビールなど飲んだがだんだんそんなまねはできないことが分って来た。旅行者は仕事をするにしても観光をするにしても忙し

い。たえず歩かねばならぬ。昼間から飲む習慣のついていない我々は飲むと動くのが苦痛になる。暫くすると酒よりも水の方が恋しくなったがうまい水がない。瓶づめの鉱水などたかいばかりでうまくもない。食事のときにも水が出ない。これには弱った。ついでながら筆者の口にはどっちかというと日本のビールの方がうまいように感じた。

フランクフルトからライン河沿いに下ってデュッセルドルフにつき用事をすませてオランダに入った。オランダはフイリップス見学が唯一の目的だったのだが、地理にうといためアムステルダムまで飛行機で飛んだ。フイリップスのあるアイントーフェンはドイツに近いので鉄道を利用した方が得策であることは行ってみてはじめて気がついた始末しかしお蔭でアムステルダムやロッテルダムおよび附近の田舎の珍らしい風物をみることができて幸いであった。

アムステルダムは風変りなまちである。昔沼地であったといわれ、地盤がやわらかいせいか古い建物で真直ぐに立っている建物は一つもない。道路に向って傾斜していてくずれ落ちそうな壁がたくさんある。観光バスに乗ると古来の風俗を残している田舎町（フォレンダム）に連れていってくれる。途中、農村風景を楽しませてくれるが、堤防の上にたって広い農地が実際に海面より低いことをまのあたりにみるのは一寸した興奮である。大規模のダム建設がいまでも続いている。数年前ダムが決壊し、広大な土地が海面下に没する大事故があって一時は放棄説まで出たが、結局オランダ人は自然に勝ったという話をきいた。オランダは富の分配がかなり平均化していて生活水準は高く、それに社会福祉が行届いていて乞食などいないそうだ。アムステルダムで一夜オペラ〝オルフェオ〟をみたが、その指揮者は何と日本に永年住んでいまのN響を育てたローゼンシュトックであった。

ロンドンには夏が四日しかないといわれる。爽やかな晴天の日が少いことを意味するらしい。筆者は幸か不幸かロンドンに一週間滞在中、曇の日が一日あっただけで、あとはすっかり晴れわたり全くの五月晴れ。そのためにロンドン塔も漱石の描いたものとは凡そ縁遠いドライのロンドン塔を味わう始末となった。

英国人は落着いている。むしろ落着きすぎている。ロンドン滞在中ある日ケンブリッジ大学を訪れたが、何と昼休みが三時間もある。午後一時頃キャヴェンディッシュ研究所を訪れたのだが研究所には一人も人がいない。小使さんらしいのにきくと、いま昼休みで三時すぎにならぬと皆帰って来ない。全部揃うのは大低三時半だからそれまで散歩してこいという。お蔭でゆっくり大学構内を散歩し、美しい学園風景を満喫したがこれには少々呆れた。ロンドンでもそうだった。さる英国の会社の人にさそわれて昼食を共にしたが、実にゆっくりと昼食を楽しみ、終って別れたとき三時をすぎていた。

ロンドンの夜は早くふける。ホテルの食堂も九時にはしまる。十時をすぎて一寸何か飲みたくなってあけている店を探して入ってみたが十時をすぎると酒類一切御法度とあってビール一杯にありつくことができなかった。もっともその日は日曜でふだんの日は十一時かぎりだとか。ともかくロンドンの夜は静かであった。しかし芝居や音楽などの催物は盛である。ロンドンのオーケストラは最近評判がよい。オーケストラ二つと室内楽を一つきいた。ロンドンフィルハーモニーの演奏はすばらしいと思ったが、だしものはベートーベンばかりでロンドンではベートーベンに食傷した。

パリは余りにもみるものが多すぎて旅行者を疲れさせる。はじめての旅行者として一度は行っておきたい有名なところだけでもかなりな数に上る。凱旋門からシャンゼリゼ通りコンコルド広場からルーヴル宮、エッフェル塔にも上ってみたいし、セーヌ河の観光ボートにも乗ってみたい。せめてノートルダム寺院ぐらいはみておきたい。ルーブル博物館は広すぎるので小ぢんまりしたロダン博物館をまず見ておこう。サクレクールの丘にも上っておきたいしモンマルトル界隈の散歩も味わいたいという風にして数日はまたたくうちに過ぎる。一度は夜の観光をと思ってバスの切符を買うと出発が夜の九時。四つばかりキャバレーやナイトクラブを廻ってブドー酒シャンペンをのまされ、よい機嫌でホテルに送り届けられるのが午前三時。パリはたしかに観光客をひきつける多くのものを持っているが余りに忙しい。仕事を少しはしよって足を棒にして歩きまわったが一週間の滞在では時間が足りなかった。オペラや音楽会をのがすわけには行かぬので三つばかりみたが、はねるのが十一時過ぎ、それから夜食をするのが普通でどうしても睡眠不足になる。睡眠不足のぼんやりした頭である日サンシュルピースという寺院に日曜の朝の教会音楽（グレゴリー聖歌）をききに出かけたが、これはすばらしかった。もっと落着いた気分で聴けばなおよかっただろう。教会の中で偶然京都から来た二人づれの日本人に会った。夜ふかしのあとではこれが一番よい薬だと云っていた。

ベルリンは東西に分れている大都会という意味で旅行者に好奇心と異様な興奮を与えるまちである。東ベルリンとの境界附近はいまだに大戦直後の廃墟と化した姿をそのまま残しており人影もまばらである。ブランデンブルグ凱旋門をへだてて東西の警官が相対峙している姿は形容しがたい気持を抱かせる。戦前はなやかなりしウンターデンリンデンの大通りは今は荒涼として取調べの警官の姿のみが目につく。この通りを少し東に行くと昔のベルリン大学があるが、建物に弾痕がなまなましい。更に少し行った右手にベルリン国立歌劇場がある。外観は荒れているが内部に入ってみるとさすがに立派である。この劇場は西ベルリンの人も自由に入ることを許されている。筆者は二晩ここで歌劇を観賞したが入場者の半数以上は西から来ているようであった。最も驚いたことはこの歌劇場の階上に約二億円を投じて最近つくられたという豪華なサロンである。二百人程度の人が昔の宮庭サロン音楽さながらの室内楽を楽しめる仕掛けになっている。筆者のきいたのは国立歌劇場オーケストラの主席奏者の演奏するハイドンの絃楽四重奏で歌劇のはねた十時半頃から始まり十二時頃まで演奏が続いた。入場料がやすいのも驚くばかりで貨幣価値の相違とはいえ邦貨に換算して歌劇、室内楽とも上席で三百円程度、気の毒なように感じた。西にはベルリンフイルハーモニーがある。昨年日本に来たのでその健在ぶりはよく承知していたがその土地できくとまた味わいが格別である。指揮者はレオポルドストコフスキーであった。

その後南独マインツの大学にいる筆者の後輩の運転する自動車で南独およびオーストリー北部の小旅行を試みたがこれまた素晴しかった。この地方の古い小都市の趣きはなかなか味わい深いものである。チロルの渓谷を通ってモーツアルトの生誕地ザルツブルグに抜けたがこの間の風景は天候にも恵まれて全く絶景であった。ヨーロッパのほんとの良さはこの地方にあると感じた。

スイスは山国であることは承知していたがスイスを旅して、よくもこんな山の中に鉄道をしいたものだと驚かざるを得ない。鉄道はすべて登

山鉄道、特にユングフラウの登山電車は標高四千米以上登り最大傾斜14という。それにいたるところザイルバーンがある。ザイルバーンというと我々にはまだ一寸危険に感じがするがスイス人にいわせると絶対安全なもののようだ。ツエルマットに泊ったときは天候に恵まれマッターホルンの全容ならびにモンテローザの景観をほしいままにすることが出来て山好きの筆者にはこれまた何よりの収穫であった。

最後にローマに立寄ったのが七月はじめ、既に暑さがこたえる季節になっていたが、それでも日本の暑さと異り木蔭に入るとさわやかである。夕日がおちると婦人連は毛のえりまきをするほど夜は涼しい。イタリーは泥棒の多いところときき、何となく物騒な気がしてローマ滞在予定日数をきりつめたのだったが、これは惜しいことをしたと思う。全旅行中で食事の最もうまく感じたのがローマであのまた古い都の奥ゆかしさというか、歴史の重みを感じたのもローマである。時間の関係で余り多くはみられなかったがヴァチカン宮、サンペトロ寺院、コロンアム、カラカラ浴場、古代ローマの廃墟、それに都内いたるところにある噴水いずれも懐しく思い出される。もう一度行きたいところといえば、躊躇なくローマをあげよう。充分みることが出来なかっただけにいよいよ心惹かれるものがある。ローマを発ったのが七月三日午前一時、BOACコメット4で一路東京に向かって飛んだ次才である。

セイロンより帰って

昭三六　若林二郎

（京大工学研究所講師）

セイロンと云えば、すぐに紅茶を思出しますが、それ以外には我々の生活と何んの関係もない、印度の属国ぐらいにしか考えていなかったこの小さな国え、外務省のコロンボプランによる技術援助のため、約一ケ月半程行って参りました。

政府の工業用開発計画の一つとして、西北海岸にあるイルメナイト鉱床の開発が国営事業として進められ、そこに用いる静電選別機を神鋼電機株式会社が製作しました。私が数年前に静電選別についても仕事をしていました関係で、その設計のお手伝を致しましたが、そういった事が関連して、運転を始めるに当り、セイロンの技術者の技術指導と云う名目で派遣された次才です。

したがって、滞在期間の大半は、コロンボから二百哩あまり離れた片田舎の工場に居りましたが、そこでの生活は可成り優遇されました。米国と違い物価も安く生活水準も低い国ですので、コロンボプランから支給された私の給与は、現地人の工場次長格の人とほぼ同程度で、相当贅沢な生活ができました。

私の他に石原産業から二人（一人は工場長格）技術者が来ておられ、また神鋼電機の技術者の方も私と一緒に参りましたので、日常生活に対する不便はほとんど感じませんでした。ただ南京虫が出て一時は相当悩まされました。

仕事の方は、まづまづ大過なく終えて参りましたが、見物の方はあまりして来ませんでした。セイロンと云うと滅多に行けない所ですので、できるだけ見物して来るつもりで出掛けましたが、現地え行きますと暑いので出歩くのがおっくうになり、結局うはべだけを見て参りました。しかし仏教の遺跡や紀元前の文化の遺跡など、その方面にあまり興味を持たない私にまで、可成りの感銘を与えた事は事実です。

私の感じでは、セイロン人は非常に親日的で、むしろ尊敬の念をもって日本人に接しているようです。それは才二次大戦のおかげで独立したと云うことよりはむしろ、戦時中に日本軍が英国の軍港となっていたTrinlo-maleeを襲撃し、多大の損害を与えた事に好感を持っているようです。今迄白人に徹底的に従属していたこの国の民族に、新たなる希望を与えたという感じです。この攻撃に加わった日本の軍人に対する、中ば伝説的な話まで伝わっているようです。たとえ敗けたとは云え、結果的には才二次大戦は有色人種にとって非常に有意義だったように思えます。

しかし永い間英国の植民地だった関係で、英国一辺倒の感が深く、政府の要人はほとんど英国の大学出で占められているばかりでなく、日用品もほとんど英国製で、国民生活の中に可成り深くくい込んでいるようです。この国の日用品や薬などに日本製品を進出させるためには相当の困難が予想されますが、工業プラントの進出には可成り希望が持てるように思えます。現にガラス工場、電線工場、電球工場、化学工場などが、日本から進出し、あるいは進出しようとしています。

わづか一ケ月半の滞在ですので、この国の風俗習慣を充分観察できませんでしたが、ただ御婦人がほとんど外を出歩かないため、目を楽しませるものがなく残念でした。酒を飲む所はありますが色気が全く無く、結局ホテルで飲んでいても一緒と云うことになりました。一度コロンボに一軒しかないナイトクラブえ案内されましたが、そこでもストリップショーに類するものはあっても、酒を注いでくれるのはボーイで、パートナーを連れて行かなければダンスも出来ない状態です。結局人の奥さんを借りてダンスをすると云うみじめさです。

帰路シンガポールと香港に立寄りましたが、シンガポールえ来て始めて、バーで御婦人の酌で酒を飲むことができました。

一ケ月半の短かい旅行でしたが、セイロンのような小さな国にも日本の産業が進出し、国家建設に貢献しているのを見て非常に心強く感じました。

第四回洛友会四国支部総会記事

六月二十七日、高松市に清野先生、大谷先生及び山村幹事をお迎えし、紅羽旅館にて才四回総会を催した。

宮地幹事司会のもとに議事に入り、三十三年度会務並に会計報告を滞りなく終り、渡部支部長の挨拶を始め、清野先生、大谷先生、来客の弘田先生、本部山村幹事が次々と立

写真説明

向かって左より右え

後列　平田　西脇　船越　今村　平井　中川　森本上

中列　奥田　河部　中沢　宮地　安堂　片岡　熊谷　徳岡

前列　安藤　弘田先生　清野先生　山村幹事　大谷先生　渡部

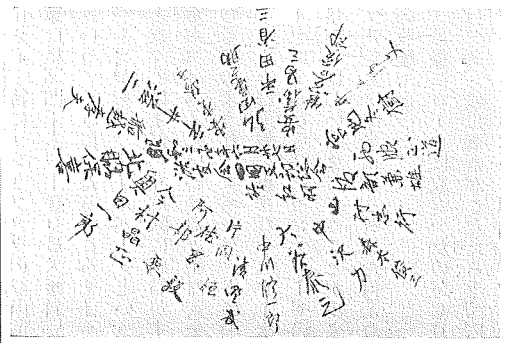
たれて興味深い近況を報告され一同謹聴した。

次に先般渡辺副支部長が原子力研究所に移られ欠員になっていた支部役員の選出に移り、北脇幹事が選ばれた。尚新居浜地区の後任幹事に安堂勝年氏が選ばれた。

引続いて懇親会に移ったが、渡部支部長が原子力事情の視察で渡米中のところ帰国された直後の事とて、話題の中心となり、色々興味深いニュースに一同耳を傾けた。

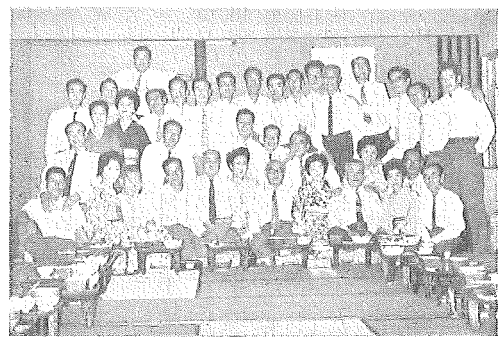
やがてアルコールがまわるにつれメートルが上り、初夏の一夜を心ゆく迄飲み且つ語り、夢多かりし青春時代の懐旧談、失敗談に花を咲かせる者、近況報告に余念のない者、御婦人相手に気焔をあげる者……和気あいあいと打ち興じ、吉田山麓の感激を新たにしつつ、全くいつ果てるやも知れぬ盛宴となった次第。

（井上博文記）



洛友会中国支部総会だより

中国支部では電気学会中国支部講演会ならびに中国電力技術研究会に御出席の林重憲先生ならびに山村幹事をお迎えして九月二十一日広島市八重で支部総会をかねて懇親会を行った。



遠く島根、岡山方面の会員も参集し、しかも久しくお会いできなかった諸先輩の御来会もあり会するもの二十八名午後六時より総会をひらき真田支部長挨拶潮見幹事の決算報告に続いて林先生から教室の現状、山村幹事の洛友会の現況をお伺いし、引続き懇親会に移った。

林先生をはじめとして会員の隠芸もとびだし会員の歓談盛んにしていつ果てるともしらず、あいあいたる雰囲気のなか盛会裡に会をとじた。

（出席者）真田安夫（昭2）、光岡彰（大11）、岡田邦[illegible]（13）、佐川重雄（大14）、木村一男（大15）、木元正夫（昭2）、高橋親雄（昭4）、竹内貞美（昭7）、潮見公安（昭8）、天野宗明（昭10）、古賀七郎（昭15）、角井　勉（昭15）、滝田哲郎（昭16）、大塚恭二（昭16）、井上　武（昭16）、江見耕平（昭17）、守分　享（昭19）、大月清一（昭20）、武田博之（昭21）、小川　清（昭22）、梶谷守男（昭22）、近藤　章（昭22）、門野内忠幸（昭23）、石田隆弘（昭25）、橋本吉昭（昭25）、池田浩一（昭28）、小刀一晃（昭28）、高橋宏（昭30）　以上

九州支部だより

台風銀座と云えば九州の事ですが、炭鉱の不況に台風の方が遠慮した訳でもないでしょうが、今年は珍しく被害も少なかったようです。伊勢湾台風に大きな被害を受けられまして東海地区の多くの方々に心から御見舞申し上げます。

昨年度は大学より諸先生をお迎えする機会を得ませんでた洛友会九州支部総会も今年度は、教室より林重憲先生と、本部より山村幹事をお迎えして、十月七日福岡市電気ビル地階サロンにて、五時半より開催しました。出席者は三十名で、宮崎、大分、熊本、長崎、八幡地区より出席された会員もありました。三池地区より出席者のなかった事は、石炭の不況が我々の想像以上なのでしょうか、再建に努力されて居られる洛友会々員の御健斗をお祈りします。

総会は高柳支部長の挨拶の後、林先生、山村幹事より教室と本部の近況について報告がありました。加藤先生の突然の御逝去にも拘らず、年々発展して行く教室に誇りを感ずると共に、洛友会をいつまでも私達の手で育成してゆきたいと思います。

近況報告の後宴に移り、恒例の自己紹介をはじめました。酒のせいでしょうか、一人五分を越えるユーモアたっぷりの自己紹介もとび出して時間の経つのも忘れる程でした。会場の閉店時間まぎわに自己紹介を終り、出席された方々は名残りを惜しみつつ三々五々博多の夜の町へ消えて行かれました。二次会の様子は知る由もありません。

なお、林先生は今年度の学術会議才五部全国区の会員に立候補されて居られる由承りましたが、御当選下さるようお祈りいたして居ります。

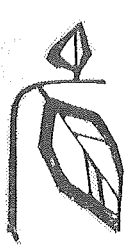
（九州支部幹事）

加来（昭11）鶏池（大11）
大塚（昭22）河去（昭5）
平川（昭27）万田（大11）
足立（昭6）野田（昭12）
松井（昭5）黒田（昭11）宮田（大15）
安田（昭12）常盤（昭3）山村幹事
森（昭11）岡本（昭4）教授
増岡（昭21）副島（昭13）高柳支部長
杉村（昭21）岐美（大13）
望月（昭03）西村（昭11）
熊井（大7）上田（昭27）山口（大14）

会費納入についてのお願い

会費未納の方には振替用紙が折り込んでありますからお忘れなくお振り込み下さいますようお願いいたします。

会費未納の方には会報発行毎に振替用紙を折り込むことにいたしておりますが、その手数が大変でありますのと、また名簿の発行等につきましても経費多端の折でありますので何卒お振り込み下さいますよう重ねてお願いいたします。



昭和八年度
卒業紀念クラス会

○総会　昭和三十三年十一月一日、昭和八年度卒業生一同は、卒業二十五周年を紀念して、京都岡崎の浜村において紀念クラス会を催した。参加申込予定数が幹事の予想を上まわり、会場決定には幹事一同が鳩首協議する必要のあったほどの前景気は上々であった。

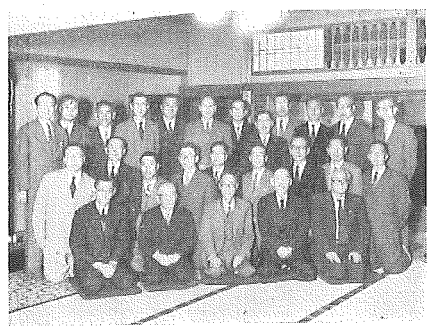
当日は午後六時、一同が相ついで顔を揃え、恩師の先生方は、岡本、松田、阿部、羽村、林の五先生が御多用中御出席下さった。鳥養先生は御風邪気味のため、また加藤先生は大阪工業大学開学十周年紀念講演会のため、共に御出席を頂けなかったことは心残りのする点であった。

我等は去る昭和二十八年に、卒業二十周年紀年クラス会を催したが、それにも拘らず二十五年ぶりに相見る旧友も、多く東は岩手、西は久留米より、結局二十三名の参会者となった。

宴が進むにつれて、きれいどころの絃歌も興を添え、深酌高唱、まさに時の移るを忘れ、つきぬ名残りを惜しみつつ、午後十時すぎ一応散会して、後を自由行動とした。

当日はかねて二十五周年紀念事業として編集した家族アルバムを配布した。不参者でアルバムを申込んだ方には十二月末日に当日のスナップを同封の上発送して我等の紀念クラス会の幕を閉ぢた。

出席者、阿部、　、奥、小原、蒲生、川守田、北川、酒井、潮見、芝、高尾、田中、中尾、西谷、西村、西山、森島、山下、山木、小野、岡村、塩見、宮本



○東京部会　十一月二十八日

西山君の努力によって、関東地区在住者のみの卒業紀念クラス会を開催、会場は蒲生君の御世話によって富士電機の麻布の寮に集合した。会するもの十一名、京都のクラス会に参加できなかった会員で、この日の会合に出席した人も多く、たまたま上京中の小生も出席し、西山君持参の前記アルバムを中心としてメートルを上げ、散会はまさに十一時に近い盛況であった。

出席者　五十嵐、石川、大塚、蒲生、久保、酒井、田井、土井、和気、西山、宮本

追記　この記録を執筆中、加藤先生の突然の訃報を聞き、本会合に御参加頂けなかったことを思って、さらに深い悲しみの感にうたれます。謹んで哀悼の意を捧げます。（宮本記）

第七回洛友会東京支部
ゴルフ同好会大会記事

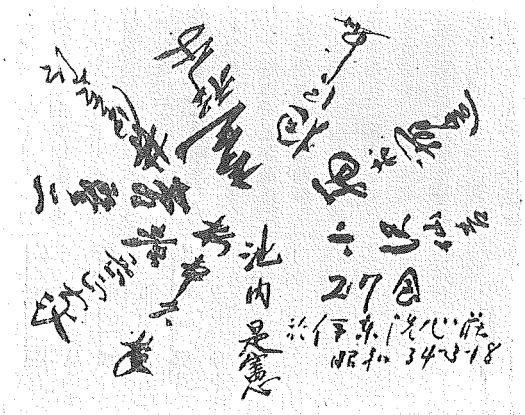
さて頭記大会は去る十月九日相模カントリークラブに於て開催された。当日は一五号台風以来連日はっきりしないお天気とは打って変った今秋随一と思われる程の好天気に恵まれ参加者一同己が精進のよさに内心悦悦の趣にて待ちに待った小学生の遠足よろしく「今日はお天気に恵まれて良かったですね」と一度は口に出す程の好コンディションの中に始まった。

成績の方はお天気程とは参りかねたが宮崎駒吉（大5）会長を初め例の通りベテランがずらり揃いのなかの盛会裡に終了した。

スコアーは次の通り関西電力東京支社の和田昌博氏（昭7）と、長らく本会の幹事であった東京電力の相木一男氏（昭15）がネット一一三の同点となり、本会の訓則として同点の場合は卒業年度の古い方を先順位とすることになっているために、涙をのんで和田さんに優賞をゆずられた。従って相木さんが二等となり、三等は松本久長氏（大9）と市村宗明氏（昭9）が同ネットで、これまた規約に従い松本さんが三等、市村さんが四等となりました。

尚入賞者の新ハンディキャップは次の通り夫々決定した。また今後本会の運営上ハンディ三一以下はつけないことになったので予め御諒承下

二七会



（伊東洗心荘にて）

さい。

和田昌博氏　二四
相木一男氏　二九
松本久長氏　七

市村宗明氏　一九

追って今回の賞品は宮崎会長より寄贈がありましたので厚く御礼申上げます。

（太田英雄記）

第7回大会スコア覧表

氏名		アウト	イン	アウト	計	H.C.s	Hcs	順位
駒吉	(大2)	47	50	54	151	25.5	125.5	
辰雄	(大5)	47	43	49	139	(特別参加)		
久長	(大9)	41	45	42	128	12	116	③
是憲	(大10)	45	43	50	138	15	123	
保胤	(大12)	46	51	52	149	24	125	
侃弘	(大12)	51	51	48	150	30	120	
辰夫	(大13)	63	55	55	173	45	128	
芳二	(大14)	63	59	66	188	45	143	V.B.
三雄	(大15)	54	53	N.R.				
三誉	(大15)	51	55	60	166	27	139	
為郎	(大15)	52	47	56	155	28.5	126.5	
川郎	(大15)	59	57	54	170	51	119	⑥
内雄	(昭2)	49	50	52	151	27	124	
井巳	(昭3)	59	53	60	172	49.5	122.5	
井兵	(昭7)	52	50	50	152	30	122	
田博	(昭7)	52	52	54	158	45	113	優賞
山樹	(昭7)	64	68	58	190	40.5	149.5	
生郷	(昭8)	50	46	45	141	24	117	⑤
村明	(昭9)	51	47	48	146	30	116	④
木男	(昭15)	55	53	59	167	54	113	②
爪夫	(昭15)	55	64	54	173	54	119	⑦
田雄	(昭17)	56	58	60	174	36	138	

東京支部秋季旅行記

十月二十五日午前九時の東京日の出桟橋は洛友会東京支部の会員と、その家族、約五百名によって埋められた、岸壁に、右岸に巨体を横づけた興安丸（戦前は関釜連絡船、戦後は引揚船として活躍した七千トンの巨船であるが、今日では、船内を観光船として国際航路船のように豪華に改造してある）があり、左岸には、南極行きの宗谷が二十八日の出発を前にして、オレンヂ色の船体をみせている。この小粒な船で、万里の波濤を越えていく南極観測隊の壮途を祝福し、その成功を祈りながら、一行はスチュワーデスの案内で、一、二等室の豪華なキャンに落ちついた。

これまでの親睦旅行は、バス乗車が殆んどで参加者も二百名程度であつたが、今回は、プランの趣向が変って、海上観光となったせいか、従来の二倍半に達する参加者を見た。

（興安丸乗船場における受付風景）

好成績で、キャビン、デッキ、ホールを問わず、ビールを片手にして、先輩と後輩と交換し、家族同志の歓談風景で賑っていた。

中央ホールでの楽団演奏につれてダンスも始まり、また、支部特設の臨時売店で、ビールや、ジュースなどの売行が大変良かったのも一興であった。

幸い、小春日和にめぐまれ海路は快適そのもので、お台場を振り出しに、横須賀港、房州鋸山、観音崎城ケ島から、江の島沖、相模湾の美しい海上風景を観賞しながら、夕方六時に、ドラの音にも名残りを惜しみながら無事に陸の人となった。

かくして、都塵を離れた船上で、同窓生や家族が、和気あいあいのうちに過した快よい一日であった。

次回も又、今回にまさる参加率をあげて、本支部会員や家族の親睦を一層固めていきたいものである。

（昭和四年卒　安達遂記）

欧米だより

阿部清

本文は去る十月十七日羽田を立って欧米視察に行かれました阿部先生から編者に寄せられた消息です。

拝啓晩秋の候益々御健勝の御事と存じます。

さてこの度の外遊に際しましては色々御高配を賜り厚く御礼申上げます。御蔭で予定の旅行を致していますから何卒他事ながら御放念下さい。

欧洲を旅行致しまして感じました事は各メーカー共余り「キワモノ」的な製品を作ってない、足が地についたと申しますか原理的には前から知れていたものを如何に安く、又寿命の長い製品にするかに努力している様に見受けられます。

何分、一ケ所に数日しか居ませぬので詳しいことは不明ですが、我国でも考えねばならぬことの様に思います。

次に、見学ですが半導体関係は日本のトランスターラジオの輸出で相当脅威を感じているらしく、結局私が質問責にあうだけで先方の研究は殆んど見せませぬ。私のロンドン滞在中ソニーがアイルランドに工場を建てることに対し英国の新聞の一部には大きくこれを日本の侵略（Invasion）という様な過激な文字を使って反対しています様な状態ですから半導体専門の人間として見学が無理なのも致方ないと思ってます。

米国に参りましても同様で、予め承知していた見学さえ取消される状態で一寸閉口しています。

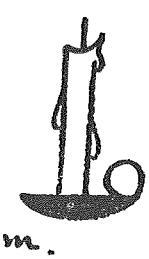
何卒、研究所の皆様え宜敷先は御礼旁近況御知らせまで

十一月十四日

訃音

佐藤雅君（明四四）
東海高熱株式会社監査役

沼倉三郎君（大一〇）
東京理科大学教授

佐藤一男君（大七）
京阪自動車株式会社々長

佐藤雅、沼倉三郎両君は八月に佐藤一男君は十月二十九日に御逝去になりました。謹んで哀悼の意を表します。